



中野集

雑下

特別
イ 4
3163
31(12)



貴
14
2163
21(12)

帝王	神武天皇	譽田天皇	足姬天皇	東宮
中宮	將軍	臣	刺史	隱士
大隱在市朝	僧	淨侶	老	老人
老翁	老愁年	道心年老深	對鏡知身老	對鏡悲老
訪友	人之沽	客	見行客	暮望行客
暮望旅客	關路行客	民	匠	高客
狩獵	獵師	漁	漁父	海人
樵夫	遊女	傀儡	垂髮	親
繼母	乳母	子	孫	まじり まじり
李夫人	王昭君	上陽人	青黛點眉々細長	巫陽臺
陵園妾	楊貴妃	長恨哥	老女	尼

雜下目錄一

白居易	浦島子	折臂翁	仙人	乙卯子
也々々	子孫	病人	罪人	流人
倭人	盜人	重乃人	心	雜心
人心不常	世路山何峻	天可度	著馱政	乍隱見
幽思	曉幽思	幽思不窮	延思	淚
憂喜同淚	憂喜同夢	憂喜依人	遠情	寢覺遠情
遊興未央	遊山催興	哀傷	春哀傷	夏哀傷
秋哀傷	冬哀傷	歲暮哀傷	帝	御葬
御をてのけ	親王	子	子二人	子孫
親	二親	妹	思妻	丈
老人	僧	旅	と八路村	蘇生

かき紙	松が糸	夕七ふくろ	形見	形見乃書
繪 <small>くみ</small> 下内	衣	鶴	牡丹	何也免
たごいこ	菊	櫛	鏡	名
中々々々	移 <small>くみ</small> 下内	藤衣	葬	墓
古墓	無常所	松が糸 <small>くみ</small> 下内	三七日	四十九日
七年	たご日	無常	寄雨無常	月催無常
月前無常	寄風無常	寄露無常	朝觀無常	夕觀無常
薄暮觀無常	寄水無常	寄火無常	老後無常	夢中無常
寄夢父無常	寄空無常	無常念々至	諸行無常	觀無常
深觀無常	無常觀身	雜無常	煙	雲

霜 泡 藻 橋 柴

花 草 觀身岸頭離根草
 琴 鐘 玉 舟 柳 落葉
 過本帳 獸 虫 塵 書 旗

族宿觀無常 伊勢 齋宮 岩清水 加茂
 住吉 春日社 大原野 布留 日吉宮
 三輪 今宮 稻荷 玉津鳥 氣比社
 蛭方神 片岡社 貴舟 祇園 朝熊
 産宮 蟻通 駿河富士宮 松尾 國常立尊
 月読尊 鶴鷄草尊不尊 天兒屋根尊 後田彦 下照姬
 玉依姬 社 社頭 社頭月 社頭久 社頭久
 社頭杉 社頭柳 社頭所 祈雨 祈晴

社頭述懐 社頭夜 社頭久 社頭祝世 社頭祝君
 神祇 春神祇 冬神祇 寄日神祇 寄月神祇
 寄花神祇 寄柳神祇 寄注連神祇 寄鏡神祇 祓_た之_た河
 賀 慶賀 衆人慶賀 祝 祝言
 寄天祝 寄日祝 月前祝 寄月祝 寄雲祝
 寄雨祝 寄風祝 春祝 夏祝 秋祝
 冬祝 寄歲祝 寄地祝 寄山祝 寄道祝
 寄道祝言 寄水祝 寄海祝 寄巖祝 寄都祝
 寄國祝 寄郡祝 山家祝言 寄竹祝 寄松祝
 寄椿祝 寄杉祝 寄苔祝 寄鶴祝 寄龜祝
 久祝君 爲君祈世 寄世祝 寄民祝 祝西人

雜下目三

寄鏡祝
雜祝

寄別祝

寄社祝

寄神祝

寄神祇祝

沙

笛

琴

挿頭

脇息

暮

舟

草

柳

薪

稻

名所

杣

塵

貝

駒

夜

滝

衣

産屋

孫

七夜

五十日ハ

在寺

元服

年賀

四十

五十

六十

七十

八十

九十

杖

老後祝

治國裁ユ松マ

雜天象

寄天象雜

雜地儀

雜動物

寄風雜

雜夕

寄山雜

寄水雜

寄橋雜

寄海雜

寄川雜

寄木雜

寄苔雜

寄衣雜

寄枕雜

寄舟雜

寄玉雜

寄鐘雜

雜色

雜聲

雜香

寄花雜



拾遺集卷之十二

帝王

雜之部下

大君を神りませばもをいづちのよりいぢせす
 用 ひとりのあち月せはあふく一秋大よみは道ふあふ
 用 阿あねの月日れは秋の君が日ふよ老くは
 古 ありと小うぶる舟の君あふをさそとまりこい
 初 輕いあきみく小ます時小をてんのみと學ふそ免つ
 代 免りて無す月日のゆへに君はあふくい
 所 白波小むより娘のこころは信やたひのとまりあふ
 代 久あれどこのあはるはるを君さあふけい
 万 たり娘はみそのあふくとみくせり
 古 峰いふ子かひのふおの日いらの時あふ
 用 つごののちのかとよまよとあふの君さ
 後 免りあふのうまふとくをさふと娘
 選子母

神武天皇
 譽田天皇
 足姬天皇
 東宮

中官

三公
將軍

臣

判史

月 皇孫
 古 中官の中おしるる里おれど美談のみぞたのまごも
 後花 是等の皇はよそおれもせとてつとつ結うけらるる
 初 くのちのちのちの光おれどおれどおれどおれど
 万 色のいれおれどおれどおれどおれどおれど
 同 ますとておれどおれどおれどおれどおれど
 同 千葉の軍よりたておれどおれどおれどおれど
 初 ぶとつゆいおれどおれどおれどおれどおれど
 同 隆吉の白多まておれどおれどおれどおれど
 同 鳥ふおれどおれどおれどおれどおれど
 同 鳥ふおれどおれどおれどおれどおれど
 同 ますとておれどおれどおれどおれどおれど
 同 ますとておれどおれどおれどおれどおれど
 後 年ゆいおれどおれどおれどおれどおれど

皇孫

い世

江信信

後景極

とほい

元明帝

虫上呂

隆吉右

橋宿藤

八束

お指

とま

家持

常長

徳士

大徳在朝市

僧

野 うい世ふとこの世のらせふとれおれりも
 同 在れ中おれりもいもいもいもいもいもいも
 六 くの程もいもいもいもいもいもいもいも
 同 世はうとていもいもいもいもいもいもいも
 同 そまこととていもいもいもいもいもいもいも
 同 弁たえりおれりもいもいもいもいもいもいも
 同 身とすもいもいもいもいもいもいもいも
 代 世むれどおれりもいもいもいもいもいもいも
 古 世はうとていもいもいもいもいもいもいも
 同 くのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 後 たもいもいもいもいもいもいもいもいもいも
 同 くのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 同 けりいもいもいもいもいもいもいもいもいも
 同 世とていもいもいもいもいもいもいもいもいも

徳兵衛

徳兵衛

徳兵衛

同

同

同

徳兵衛

徳兵衛

徳兵衛

徳兵衛

徳兵衛

徳兵衛

徳兵衛

淨侶

老

物 ちかづつるの光のそとをくらふのやうに言はるる年
 因 杉のしんぞのれ若ふすは海の袖のあらまきやうやうなるま
 疏 ますふみさつてびせぬやうのとちりさぬとちを疎々
 糸 多にきてまきぬれども一月あわづまれば人のあつゆ
 古 子子振うちの手をきりたごきとらふと一のぬねを
 因 世の中ふさをぬき相のほの國たがひの格とるねとせり
 後落 乞の波よせといふいとるきさるん物ほのさういふえ
 金 年よれがふといふといふとちかづつるまきとらふと
 形 うちあづる久遠を世にさくさくあらねばうへ後若てま
 因 大なる小なる月日分ればは家分ふと一のほのそとせり
 因 ちかづつるにやとて代を松のまつとせまふ年とていふる
 代 ちかづつる小我身とちかづつる松のまつとて松のまつとち
 因 ちかづつる松のまつとちかづつる松のまつとて松のまつとち
 因 ちかづつる小我ねの後若てせしとちかづつるまきとらふと

因 ちかづつる首のそとをくらふのやうに言はるる年
 葛 物ほのあらまきとてたむいとちかづつるまきとらふと
 古 ちかづつるまきとてたむいとちかづつるまきとらふと
 後 年よれがふといふといふとちかづつるまきとらふと
 後落 ちかづつるまきとてたむいとちかづつるまきとらふと
 形 ちかづつるまきとてたむいとちかづつるまきとらふと
 因 ちかづつるまきとてたむいとちかづつるまきとらふと
 因 ちかづつるまきとてたむいとちかづつるまきとらふと
 因 ちかづつるまきとてたむいとちかづつるまきとらふと
 因 ちかづつるまきとてたむいとちかづつるまきとらふと
 因 ちかづつるまきとてたむいとちかづつるまきとらふと
 因 ちかづつるまきとてたむいとちかづつるまきとらふと

老翁

老人

關路行客 民 西 狩 高客 獵 獵師 漁父 海人

詞 國のゆるみかじりて遊興のあつちのまはるゝかきや
万 みるこころを平をわちのよのゆめかたきく
格 望川のこほつちのまじりて舟をたもむるに
代 夏つちのじつとたかくまうてのまはるゝか
万 まがすのむらひのこまがらふかきや
万 舟の常あつちのむらあつちのまはるゝか
同 ありてすべからず舟をたもむるに
同 舟つちのまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや

樵文

同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや
同 舟のまはるゝかきや

遊女

傀儡

垂髪

親

継母

形 結くわいののし長しぬ誰ししねまむこゝのぬくうみり 為女

同 ちう波のよす日結ふ世公をたあまし子されが若く定めず よみ人

代 あそれある身のあるひも誰ししねぬぬぬれりたまれ 抱きぬ

後 いだこり定ぬぬ入身之り人の心公若とするよ小 能因

古 しまるぎの夜巨あり一様をた量ぬぐぬくすか付小 後人

万 おい中とむ少いもやいふはてさうの中よあままれれ 小黒栖

同 何ぶの乾いさうと何すき母と公のよとさうまれれ 真六呂

同 父母えあわてどもや孝枕むむいゆたさうまれれ 黒常

後 まなごうらちりて他なるやのぞいませ母とまれれ 首上呂

格 人の眼の心をよみあふひと子公をたあましぬぬせ 菖蒲

初 人とあく物のちぶと依りあうあてやと量海に夜子よ若 とも母

代 本代か小多にあつあつるをた公格の毒に般見といみよ 義國妻

金 公とむ一社の愛小みいづりねのいさめを強て久し子 歌氏

信 信濃あるその系又社あふひとぞ我えき本と今いね 西家

乳母

子

後格

くくあくいこむるおちいあては各の家乃あのとせんとハ 色園

同 十とあふあれやまとい一賢くがわちあつそちせ 赤坂

形 長とそとみ立一立い世公をたあましぬぬせ 杉子

万 白くいあぬいむい何せんは増ゆる室子あまれれ 信氏

古 世中かさぬあのかくたぶちよとあさく人の子たまれれ 兼宗

同 七文又何おひぬい何のまろまれれ 志まれれ 美子

後 何ぐいこむるおちいあては各の家乃あのとせんとハ 太政

格 志がぶいこむるおちいあては各の家乃あのとせんとハ 贈皇后宮

同 長竹の家よと小女ぬいぬい強せ決いあるまれれ 朱雀院

後格 志がぶいこむるおちいあては各の家乃あのとせんとハ 花山院

同 美ごの子弟人多く色つむるさう葉の松のみまれれ 出羽舟

同 儀草生小葉よなれた古にの松いまれれ 内大ト

金 分小増る物あつるをさうり子いまれれ とも人

初 するつる物あつるをさうり子いまれれ 信内信

孫
まづら
たよ姫

李夫人
王昭君

世の中細小なるうらやまの所は子の秋をん年瓜なるかり
 年用ぬる竹のよりの所へしては世は長くをんこととを
 あり秋風いふふと夜本世の秋がうらやまの力なり
 よよと見ればあはれ小あはれまはすいふふ子ばは梅子丸を
 秋のあはれとをまはすいふふと見れば我子の子あはれぬ
 海東の沖ゆきかきさうらうらと見えさうらうらと見え
 本はまらりしれは神宮をよそいひさすき松さきよ
 中月ふあらしあはれ後の為とてとを言さす
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え

上陽人

青黛點眉細長

巫陽臺

陵園妾

楊貴妃
長恨哥

老女
瓦

昔金少いあはれ姿小あはれとて秋のよそをかきさうらうら
 たる日と秋のよそをかきさうらうらとて秋のよそをかきさうらうら
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え
 ありさうらうらと見えさうらうらと見えさうらうらと見え

曉幽思

幽思不窮

野 ちろちろのしほまをそとそあえいふ小使のめおたひの 西り。
 同 かさげそ一着た之程思つてあがらまうそ世のいふれ 同
 同 教あつぬ身せゆはあふらふとんといふてとて世のいふれ 同
 代 妙はどうとそふ入らそをあらわむ身そ日かへすれ 同
 同 うき世とそいふすのきど命結すかふそと世のいふれ 同
 同 行末をそ手つふそをゆいそまといふそと世のいふれ 同
 同 うとそとそ家分の秋小あつていふそと世のいふれ 同
 同 身たそとそ心つていふぬ思ふあつていふそと世のいふれ 同
 同 まいりまど世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 古 身とそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 後とそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 ちとそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 あつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 いづこか身せうそまといふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同

同 ちとそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 いふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 何ぞ小とまあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 家あつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 ちとそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 四方の海を祝のちあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 身小まといふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 いふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 代 ちとそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 我とそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 世の中はあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 後の世とそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 されあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同
 同 とそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれあつていふそと世のいふれ 同

雜下十

延思

憂喜同疾
憂喜同疾
憂喜同疾
憂喜同疾
憂喜同疾
憂喜同疾

疾

代 ながりこたうに身のくせおぬるそとがぬぬをうせし地あり
所 敷うぬ身のちか木なり一花つ能うぬふく世に恨ん 舞蓮
同 いくわく恨れずんたをまわらん世の産のまごて世に 西行
同 りまの娘を思ふ人あらん昔をいふこころあつていふ 俊成
同 分たそとせりこころあまきそむき世にあり あり
同 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 和泉式部
同 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 仰光
金 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 季保
六 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 上総
千 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 貴之
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 歌方
千 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 兄の
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 冬彦
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 永観

遠情

寢覚遠情
寝興未央
遊山催興
哀傷

代 花あをてか葉たをてかふくのあをてかみり世に
同 ながりこたうに身のくせおぬるそとがぬぬをうせし地あり
同 敷うぬ身のちか木なり一花つ能うぬふく世に恨ん 舞蓮
同 いくわく恨れずんたをまわらん世の産のまごて世に 西行
同 りまの娘を思ふ人あらん昔をいふこころあつていふ 俊成
同 分たそとせりこころあまきそむき世にあり あり
同 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 和泉式部
同 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 仰光
金 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 季保
六 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 上総
千 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 貴之
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 歌方
千 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 兄の
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 冬彦
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 永観
代 花あをてか葉たをてかふくのあをてかみり世に 舞蓮
同 ながりこたうに身のくせおぬるそとがぬぬをうせし地あり
同 敷うぬ身のちか木なり一花つ能うぬふく世に恨ん 舞蓮
同 いくわく恨れずんたをまわらん世の産のまごて世に 西行
同 りまの娘を思ふ人あらん昔をいふこころあつていふ 俊成
同 分たそとせりこころあまきそむき世にあり あり
同 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 和泉式部
同 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 仰光
金 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 季保
六 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 上総
千 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 貴之
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 歌方
千 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 兄の
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 冬彦
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 永観
代 花あをてか葉たをてかふくのあをてかみり世に 舞蓮
同 ながりこたうに身のくせおぬるそとがぬぬをうせし地あり
同 敷うぬ身のちか木なり一花つ能うぬふく世に恨ん 舞蓮
同 いくわく恨れずんたをまわらん世の産のまごて世に 西行
同 りまの娘を思ふ人あらん昔をいふこころあつていふ 俊成
同 分たそとせりこころあまきそむき世にあり あり
同 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 和泉式部
同 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 仰光
金 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 季保
六 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 上総
千 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 貴之
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 歌方
千 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 兄の
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 冬彦
代 ありあつていふ相とつれと縁をいふと人あつて 永観

夏哀傷

後格
時一とあれはけさのふあなまいぬ長女の糖うらふやあ
秋
美ふ公にむいぬす梅巻はひさねとよよとてそえ家
目
色はがらむらゆいゆい見えさ小龍おまふ花れあきの
目
茶さみらまの基あてあめせんうさの一本せむいそわれ
目
梅もるよれ果てのあきらあまのちかぬあふせすま
目
花見たいいよ家徳をいふれぬまうんとあふ人ーまをれ
月
いふあはうきせすして梅巻こそよ同い美小娘さん
目
梅巻いふあさうふささのいど後のうかまはさうのき
代
夢のふく笑つさうさうる美あう柄のたまさる藤の夜
目
まもるうき基あてめさうあをささうあまいつとあれん
目
夢後のそこの後とあまさといえうんはあういむう
目
ちかゆの氣いあさういあふあささあぬあの後さうり
目
あがきい後さあうらうのいん秋いあめあうん
目
ふとあさういれとあふあてあかぬいともあううう一
上総
李通
豊之

目
君あてあさる此の表座なぐあふそへもさうもあ
目
梅はこれら里の朝ひくこりつあひひはあま
古
う人の若ふより子規くそきあめを鳴ははあかん
古
あはれあえてあかん朝ひくこりまのうらううれ
目
うわいよつとくとあくほとさすまてこいあういふ
後格
見えさ小龍ぞこがもあれあやあぬあうあのか
子
一さうあまつてあかん朝ひくこりあまもまも
目
あふらとあまうさうれほとさすあてあかのあてあ
目
あやあ梅後のあふぬきさうさうあぬいをはたう
目
玉ぬきとあああ糸の糸あううはあれん梅とあ
目
墨波の秋あさるねとさうああありとぬ後あり
目
あやあ茶うんいあさうれ後のうらうん神の心いそれ
目
あてあああうんあああ茶うんあまういふあ
目
何のうあああうんあてあああ茶うんあまういふあ
鳥羽院
舟敷母
印侍
後忠
國信
小寺將
盛武

秋哀傷

冬

大 時とわれ秋や人のまろきも成るる不為きりの公 止岑
 後 色ゆき人ど秋ととあふ不能たお葉の異子とえかれ 戒仙△
 同 ちあふ不為きり秋の露だうりやらん袖とあひくまを 玄上女
 後格 兄んといひ人まろく清めせ袖のゆき秋は思ふれ 愛方
 子 秋を不為たせぬば見り袖と人小ぢり秋ぞ悲しき 雅原
 同 ちあふれもせぬら不為法の袖もつゆ並秋のうらたせ 通法
 同 命あきばその秋十月のまろか一人小色長あきふ 経因△
 同 物とど美あきし何とあをさう分り花秋の心智いり 久春太政
 同 袖あき秋の夕へあれさう清しあきぢがあせさう 女房
 同 雲條のそでへあふさあふ不為たすあす露だこけり 具平
 同 唯とこれ花の袖もあつて袖くま秋のふささ 雅補
 同 ちとさ秋のまろ時のまろくす袖もささ小ねさあけん 後徳大寺
 同 秋鳥のあけふ身を並あつて光清あさる人ぞ悲しき 重保
 大 秋月とれ不為きりあき葉はささび人の後さうを 女房

歳暮

帝

格 ちあふ不為きりあき葉はささび人の後さうを 女房
 同 世の中小うさぞろけり白雪のうら清ぬる袖とあひく 言光
 初 白玉のうらけ小うらあひぬらあきささぬ袖のくぐれり 肉大卜
 後 ちあふれもせぬら不為法の袖もつゆ並秋のうらたせ 通法
 同 命あきばその秋十月のまろか一人小色長あきふ 久春太政
 同 物とど美あきし何とあをさう分り花秋の心智いり 女房
 同 袖あき秋の夕へあれさう清しあきぢがあせさう 具平
 同 雲條のそでへあふさあふ不為たすあす露だこけり 雅補
 同 唯とこれ花の袖もあつて袖くま秋のふささ 雅補
 同 ちとさ秋のまろ時のまろくす袖もささ小ねさあけん 後徳大寺
 同 秋鳥のあけふ身を並あつて光清あさる人ぞ悲しき 重保
 大 秋月とれ不為きりあき葉はささび人の後さうを 女房

旅表

千 けせむて又逢まづき起りておすけり人ぞわづらひ
 万 家ありて妹がままうん早まらう旅中つらむびと長
 万 踏らの岩のしまるる我をえきと妹が待つてあんな
 万 多くと家まつ君いら川の貝おまづてあといえずや
 万 荒むおよせのぬれ枕おまきこれごととれ々き
 万 阿まざうのいまたあらむお君をきてあいつあはれ
 古 くらそむゆきうむむとぞむいこいへうぎの門出せり
 後格 何々いひいそん始りいまうごよんくわたりおけり
 千 結んといひいそん始りいまうごよんくわたりおけり
 万 づつこの重縁とちをむきつらつておまをん宿のり
 万 船とあふつそふあふつ誰うへ今い家をまつん
 代 とんといひてあ一君されん限とすぞぞぞまき
 万 百づついひあはれ又あむ略とるのこみえをきく見ん
 万 ついでりのなとむとてうごまのふくふとむらうらむ

今時の

女位
 上宮太子
 人まろ
 同妻
 丹比美人
 とらみ人
 浪ま
 嘉云
 祝巻
 東 笠式ア
 後人
 大徳皇子
 常宗

同 救ふ小これとむきね相らうぶの子みと長といふよ
 同 寿とて小きとむらむらむらもあき家水のいん君ぞ起き
 後 多た又我分れとていひきとん年暮れ花をみどと
 後 鳥七命とておあうが君決まらぬとらふぞ起し
 同 たらふ若小娘のゆえうごまうくそらこれとむら
 後格 ねとすう髪とむとれすういん後の長ぞゆき
 同 知人もあきおあお今とておがそといそぞうら
 金 つゆの分れ清とてあむ夜まけらうあてあんとす
 同 家のえ小門出りしと船とむのちちかくやあふ
 羽 加とんとむら命のせうとておとらねんそぞうあき
 千 光とらとむつすきか子親志のちあれ友とて
 同 誌愛小福とて秋の月いとら小あんとそぞうあき
 同 秋のうらぬ世のせれ寿魂むらあやせ人のとら
 同 長とらとむとむとむらあむあむあむとら人のあ

雜下十

東院のこ
 とい人
 いせ
 とうゆき
 後人
 一條院
 皇后
 同
 皇女
 希飯
 吉相院
 女位
 長房

蘇生

形 之やしくは後小ありんと思ふる身入を恨といえまし物也
 後 貴れ小跡並る若れ下ぎて日と信程のらちあるすれ
 代 いかんそあすくとあ身小せらひるより權代とあ
 同 子規うそひおきておの心考の世乃し一人おせん
 同 ありその恨れつむのあ小りての心語せつゆゆるるなき
 同 君のこもあつるなきまをたはちわげとらふ家袖とみよ
 大 志の心集とみてかゆう一つも一人より先とせりとして
 後 心せらうとあつたこえおんうきよあおあよとせまん
 後 志乃のこゆよ方をあおえず親小なきごらあせしこぞ
 古 君まをこ燭のえしう塩の海のうまきひくみえさるるか
 後 志のよの夢れ因わいひきと君あま君せりてみんとし
 同 君あまを秘せしとあてをあつて夢現とくまらるるを
 同 かき人の親が小えぬおりのそ小涙とあぐんせう
 素繩
 白紙
 山田
 海
 安子
 玉層の糸
 長糸
 五人
 同
 つとせき
 大政
 後人
 以世

あきり

同 君がいりややいづれとあつるものぬりた若とみるぞおつき
 後 ひとりたわれ初あ歎つれらるる若つてまことあつらり
 同 能くおあが先一人おれたに若小いひとり月やすきとん
 子 光くひあく夢とてえん若きれとて列まのあつらりるる
 男 あき人の泣きとて小とえきとてあつるぬ里あくあつらるる
 初 清滝やせの岩波をさし人い何くの風ぞ身あつて
 同 りゆりてれが背の泣あつらみくまごときとまらざりて
 代 歎つるあつ後とさるはのまごの門のむごときこれ
 六 君まをさるる若れ板まより月のりるあつれぬれ
 同 志のあつ波きよる若れをあつあつの枕とまきとあせらるる
 同 妹が名はらよ小あがれん姫鳥の小松がこれ小若きすとす
 同 能波がこ波平あつてその沈みあつ妹があつてみまき若り
 十 世の中あつらうきとてお身をあつて海ききとて海くあつち
 十 何のあつらうきとてお身をあつて海ききとて海くあつち
 浄正
 赤坂
 長糸
 後人
 大政
 後人
 以世

おぼろ

身とたつる

藤衣

彩 又いさふやがまきねぬ敷分こえとらりて合白い先起いれ
 金 その髪とどら敷やまきるとかどらるるていどわらう
 同 出いこたをたぐらぬのまきあらむをて人おとれすくへい
 代 とりかきしりの内はみぬ人の敷きらとらるるすやあま
 同 多き人て君がきかくくくうとんかかしく思ふかどか恨え
 同 立より一衣がねねをゆりゆきこころの事ゆよりいづれ
 出 藤衣りりき糸のむじんのはれまのどとどあぬ
 後 藤原のこまこさけいすたよる村へきこて袖ぞゆりゆり
 根 君あくるいりねき藤衣はたよこきるそ怨いこらとす
 後拾 出すくこ衣はたよるれどさきい後ゆりゆりそで
 同 こんどい敷えとらんと敷ふへてさやあつるいむちぞれそで
 同 藤衣とらり種のをよこみ起ておとぬかどそらりかき
 金 草木まてふしりてえんゆりか松の藤の衣きんさり
 干 恨むて二きとら藤む藤衣後とららばまこいほるれ

藤政
 色房
 元任
 新大納言
 一条
 永孫
 忠岑
 山鳥
 敷世
 敷生
 一条院
 元補
 新守
 貞憲

華

日 色いさくきき藤衣きり日敷のあまこすれ
 同 葉のちいどぎきりうぬとぬねや君が衣あま
 同 他人のたきくまをよこみ起てしりゆり根葉のそで
 同 吹くよくあき葉の枝れ朽かむ何ぞ敷えあま
 代 藤衣きり恨不とらむつ後のはみぬくどく好き
 同 うちむぬく人きりていあかむいづる不種はぬねら
 同 みるむとら葉葉の衣よへまおつそ袖そ怨い
 同 ひとへいみきりて藤き藤衣きぬる秋とらゆりゆり
 同 ぬきうらむ後いさき藤衣のそとよりえまきうは
 古 葉のちいどぎきり藤衣の葉とらりてまき
 後拾 葉のちいどぎきり藤衣の葉とらりてまき
 同 ちいどぎきり藤衣の葉とらりてまき
 同 ちいどぎきり藤衣の葉とらりてまき
 同 ちいどぎきり藤衣の葉とらりてまき

久我大
 持範
 長方
 元補
 益補
 さうみ
 通房室
 重補
 新守納言
 持正
 忠命
 小信
 圓融院
 後集女

寄雨無常

月催無常

月前無常

寄風無常

代

知くはるに人多くきこゆ也あをれらむき世にふん

元性△

後

社うく村あつるるる数方小はらふゆふにちり

とみ人

代

みくやまきこむつとこまのあがら小ねき世に

三河

松

ち小むすぶあ小をねる月くあひるかきよの世小社

賞之

千

流を小を明け月くみ物いひあふ小君まをふん

君伝

同

入ぬるあねあのちささささるれをのり月

元性△

代

世の中はあ小君はる月をねすみりくくくをえぬ小

公任

後

ちとそくをくくくくくくくくくくくくくくくく

春婦教

詞

秋小又あそんちりりちね方へと秋斗の月をく小

三條院

初

のり小えれ人いえいせ入小月をくをきあそり

恭時

同

長さど又ささるあつるんきさくくくく月をく

安太政

同

これあそくくくくく月をくくくくくくくくく

蓮生△

同

ちの輝の世とあかち物と秋風をみねむつるう

家持

末

もみぢづはを小はせをるるるりりりりりりりりり

千里

松

ちりきく秋のよ風のさびき小妹をみね小糖ひんとは

國章

金

柳は色いとけのせの身小くくくくくくくくく

圭獨

秋

らうまきく結きせくくくくくくくくくくくく

式子内親王

後

秋風の身小くむ斗小くくくくくくくくくく

朱仲

古

流ゆかどあはる物とちりき小家小くくくく

くれ中と

後

殊代よせつづくのみあかちあつるあつるあつる

とみ人

同

大く小くくくくくくくくくくくくくくくく

同

同

ちあを小くくくく秋の流斗くくくくくくく

玄上女

松

秋を小かづく家祭はあまうい流り一人をかあつとん

毛磨山雲

同

うあえくく家祭はあまうい流り一人をかあつとん

亦務

後

家小くくくくく秋のよ流をくくくくくくく

能宣

同

くこの祭よかぬ斗の流の身小くくくくくく

定規

金

會ゆり流をくくくくくくくくくくくくく

是松△

詞

よそ小くくくくくくくくくくくくくくく

四条中宮

詞
初 初く爲の... 増
新 初く爲の... 信
同 初く爲の... 遍
同 初く爲の... 周
同 初く爲の... 具
初 初く爲の... 相
同 初く爲の... 僅
同 初く爲の... い
同 初く爲の... 夫人
同 初く爲の... 親
代 初く爲の... 和
同 初く爲の... 行
同 初く爲の... い
同 初く爲の... 大
同 初く爲の... 大

朝観無常

代 朝観無常の... 圓融院
同 朝観無常の... 普珠
後扶 朝観無常の... いろ
代 朝観無常の... 西
同 朝観無常の... 和
朝 朝観無常の... 全
後扶 朝観無常の... 堀川右
新 朝観無常の... 兼
代 朝観無常の... 季
同 朝観無常の... 先
同 朝観無常の... 東
同 朝観無常の... 本
同 朝観無常の... 光

夕観無常

代 夕観無常の... 兼
同 夕観無常の... 東
同 夕観無常の... 本
同 夕観無常の... 光

薄暮観無常

代 薄暮観無常の... 兼
同 薄暮観無常の... 東
同 薄暮観無常の... 本
同 薄暮観無常の... 光

寄水無常

代 寄水無常の... 兼
同 寄水無常の... 東
同 寄水無常の... 本
同 寄水無常の... 光

雲

霜 泡 藻 橋 柴 花

万
たぎれりのみ母れは小色生の者小あんどとまひるあく小鳥子
金
とどろのまのりそをの申れまき色山のまきもの物とり 虫巻
野
鳥まをいふ良とあましらんゆあまののみひのしんを 露蓮
用
才た小色をのまれけりあく分のえりあくりぬねをきり 美人
代
母の才を何みいれんと人何ぞきりしりぬねのしんを 順
残
あまのまのりよけあまのむねだれまてよき色をい
代
あつふとまみずきしるる言よらんけき人せ何よ 毛唐の髪
用
あまをぞとあてみぬの清き色とあまのきよあいまはる 宋花
後拾
かれるるあまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 知法母
金
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 人まら
拾
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 敬唐
代
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 山田
秋
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 忠正
代
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい

草

玉 鐘 琴 落葉 柳

現身学額離根草

初
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 並補
拾
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 美人
野
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 能宣
同
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 故人
同
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 皇親の権
同
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 益補
干
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 小文進
代
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 国信
同
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 元光
干
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 式ア
同
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 諸人
初
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 珍貴
代
あまのりよけあまのむねだれまてよき色をい 山田

加茂

任吉

代 男のこらふふくと色まのいかに月よの歌ぞすれぬ
 因 美之ぬらわの夜ねきくれて美世まて小つゝ入るきこれ
 因 宗のあふしはたのちあひきき君ふぞ神いんよせざる
 因 ちね下あふのふくは橋をきあのえきは才あぶつとよ
 因 ちあわの神よりつて裁たるのきあのさつとれなごうん
 因 鏡ゆくふみうくのあは曲小うの斗のちをゆき
 代 諸人のこもれば神ふまはせむはぐき内小は分ちりれ
 因 ちあんとすす世のいせむびみうく川のちあはぬ
 因 神せういふ賢てみあをいさふあひをぶくそあかん
 因 ちみ衣みうく川小ねえて色まふかむ小あぬこのよと
 因 ちゆり川の川さみよをあてみくちゆりて平あかん
 因 君みきく揚ふ吹ふくきと神のわごふくあふちあみ
 後 ちりちういと神のあひいせむぞ久し任吉のまつ
 後 任吉の神の長とさうくくむあきき身さうくときくたむ

龜氏
 楠尹
 ちあ人
 彦重
 伊宋
 大補
 後任大寺
 上東門院
 隆信
 妙法
 後三葉院

因 ねてえ久くねね任吉たまぐふのいぶのあやみせあん
 因 任吉の松さくをる柳あふむ何きうの志あかあかん
 因 ちきつるを吹あふくか任吉の松のつえをあふくは
 因 任吉のあふ小いなる松より神の平をあふそれあかん
 因 ちあんとくそかあふ神をれを揚ふ小ねさあかん
 因 神よりてはもその浦又きるく神わくくん年の長くた
 因 いの中より久松とく任吉の松をこむいひをとりぬる
 因 ちあふと君りくはなつての久き世より神む初てき
 代 ちの海やあききく系のはまより歌れぬく任吉の神
 因 美づくくふくきくそと家園小歳世ねらん任吉の神
 因 任吉のちよ小くむ逢ねをまのいひをみゆきせと
 因 いあかんあふの忠業はあふく天くくろく任吉の神
 因 ちあかんあふく又ゆきいんあせし美あやうれ任吉の神
 因 ちあかんあふく又ゆきいんあせし美あやうれ任吉の神

赤成
 室如
 隆信
 資業
 丹大卜
 隆業
 益直
 益直
 益直
 益直
 益直
 伊房
 隆平
 隆成

春日社

後格 久まつる三益のこれ社ませむありのこふに君をささる

金 三益の社の代いにちがくあまきりといはれしを

新 美世を新そくすくすきま日にの家の流り

代 五の社にますく三益のく不之れぬ人の阿が

同 天のこくくまよとこを社にみまのふりて

新 実まつる社の中かびく説きふ流りてさ川の川を

代 八女をたむとた小くつこをま日に社を小直りて

同 ま日ぬるこをこれにちよててそのまにまつ小を

同 きこくこの初するあれやま日に峰とよをさく

古 大弟やちのふとくそへ社よのそくをいひて

新 ちか社の中を社にのみ染く色にうる物を

代 石とこの社の叙の社にまたてこのあて敷君のく免

同 ちてまつるの社といふあにいふ世小くあまきりて

同 ちてまつるの社といふあにいふ世小くあまきりて

経家

布留

大原野

籠坂

寛光

賢仲

小舟

惟方

太政

能宣

忠房

倍光

兼平

道春

直直

豊内

経家

日吉宮

三輪 今宮

稻荷

玉津島

気比社

蜷方神

片岡社

貴舟

後格 久まつる三益のこれ社ませむありのこふに君をささる

後格 三益の社の代いにちがくあまきりといはれしを

初 美世を新そくすくすきま日にの家の流り

代 五の社にますく三益のく不之れぬ人の阿が

後格 天のこくくまよとこを社にみまのふりて

同 実まつる社の中かびく説きふ流りてさ川の川を

代 八女をたむとた小くつこをま日に社を小直りて

同 ま日ぬるこをこれにちよててそのまにまつ小を

同 きこくこの初するあれやま日に峰とよをさく

古 大弟やちのふとくそへ社よのそくをいひて

新 ちか社の中を社にのみ染く色にうる物を

代 石とこの社の叙の社にまたてこのあて敷君のく免

同 ちてまつるの社といふあにいふ世小くあまきりて

同 ちてまつるの社といふあにいふ世小くあまきりて

經家

兼政

安岡

道春

豊方

長能

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

祈雨

祈晴

社頭述懐

社頭夜

初 夕の月よ小を明の月あを電くくしてよるす神
 劫 夜やいびくを孫の神祭小ゆつてくそ世派初る月
 月 日の糸の位小のむをあだあます神の事とおもえん
 後 小のすきむすむれつて歎くゆ絶あむ神のとくとん
 代 良と七妙くあをあらん人えんをあす小たすを
 同 色をえ捨くゆあめりる小をいんハ神りる人
 同 人こそい祭をいしあぶる小神を良とかどまぶる人
 金 毛川苗代あ小せきくををります神あむを神
 劫 ちあ田のうをあ汁せきくををりよふおとせ何この神
 初 天つせあめりや一を吹くをを吹くを一日たみくを人
 初 くれらる藤の束をの起きくをを美の白を乾登神を
 形 神が小そのりよいあをねり神小をいんねまをねり
 劫 祭祭を神と神にねり人りねくある人の後り
 代 けうくそをれとをわつてんねをさふ小夜をうらま
 美人
 虫米
 海沖
 尾綱母
 仁徳
 信女
 りる
 能因
 幸年
 益也
 歌神
 朱信
 益也
 信方

社頭久

社頭祝

社頭祝君

神祇

春神祇

冬神祇

寄日神祇

寄月神祇

寄花神祇

同 神代より神の言えん神よりいものといま小年をいある
 形 神をいすの川代より成ちよすわとそをうらめん
 代 秋津島神のせよする園あむをわつてあむいある
 劫 けしてあむあふそ移る祭祭の代の子年小をいん
 代 神風やいす川を流れていくあより君いすの
 後 神祭あむをい色に流ねあり神のいりよとん
 形 毛の二三巻のいりるをねりるあむい方とあむ
 代 ときえあるいの神をねりてあむをねりる小をいす
 同 りむるあむの神をねりつてま来あむと知らあむ
 同 若来あむをいあむの子振をいあむをいあむの
 同 いふあむをいあむの神をいあむをいあむの
 同 すく川をいあむをいあむの神をいあむをいあむの
 同 あむを神のうらあむの神をいあむのいあむをいあむ
 同 ねりの後ねりあむのねりまよりあむをいあむのいあむ
 美人
 虫米
 海沖
 尾綱母
 仁徳
 信女
 りる
 能因
 幸年
 益也
 歌神
 朱信
 益也
 信方

寄御神祇

寄注連神祇

寄鏡神祇

かみりそり

古 寄御神祇のしち葉のきつねのきねり
 形 神うぐやしの田の系は柳葉小のりかひるね日ぞうた
 代 其れせり子孫のふむを君が為の水き焚や結びそめん
 同 是れきますみの月々も小ます君は娘のうみあふん
 形 ねくやきの丸の小鏡を道むありてつりへる子ぞ
 同 其れ小鏡くもね柳葉のふや人のとめさきくも
 劫 其れを神にそよきりて川の石のふむたいごうつり
 同 ちとつむあふちと柳を捧ちまゆみつきり一れいあ
 大 大らとせが為のあひて小くそむへぬとて抱ひてゆえ
 同 是れけのふはふみきつる柳のえを枝よきつる
 代 ねくらの考こそゆふゆふなれもそのまゝとてあへん
 同 津代より後そめり是れけのふの柳をさくもさく
 同 そのふけをりつる小を鳴て聲をえのむゆも其人
 同 十の柳もよき日集れあすもろをねのなをを衣あきん

祝

慶賀

衆人慶賀

古 祝のしち葉のあふちのふむ子孫にのり君小始ん
 同 ちとつむあふちと柳を捧ちまゆみつきり一れいあ
 代 其れせり子孫のふむを君が為の水き焚や結びそめん
 同 是れきますみの月々も小ます君は娘のうみあふん
 形 ねくやきの丸の小鏡を道むありてつりへる子ぞ
 同 其れ小鏡くもね柳葉のふや人のとめさきくも
 劫 其れを神にそよきりて川の石のふむたいごうつり
 同 ちとつむあふちと柳を捧ちまゆみつきり一れいあ
 大 大らとせが為のあひて小くそむへぬとて抱ひてゆえ
 同 是れけのふはふみきつる柳のえを枝よきつる
 代 ねくらの考こそゆふゆふなれもそのまゝとてあへん
 同 津代より後そめり是れけのふの柳をさくもさく
 同 そのふけをりつる小を鳴て聲をえのむゆも其人
 同 十の柳もよき日集れあすもろをねのなをを衣あきん

同 君が世小いま歳にびくわつてうまきもこも小あんとすん
 同 良之ぬ松と舟との末の世公いつま久いと君のこをみん
 同 君が世に松をあらはる君が為るやうなるのうきとあまきむ
 代 君のまきやそ氏人の君がいあひとつらよいのいむりて
 同 しのづらう我が身を社いもるれ君が世ありありあり小
 同 君が代の程代むもて後者の松公久いとあひなる小
 形 葉からて立る程のうれこ小松す後の代ゆもこが
 同 秋やらの葉やままうとあまきむ入後のう小をむる小
 形 うれしと昔の神まつみまうと秋の身ありあまらぬ小
 後 子とむ松と糸と小まきせつやかあ代いとむらん
 月 新米と我といあ小いのあまきむるなこ代小あむる身あねむ
 六 しく世をさうていといとつゆのあまきむこあまらぬ小
 代 君が世あがごのう小ニ葉ねる小松のあまきむるま
 同 きみり世のうれとあまらむ地のうれとあまきむいのうてく
 同 君が世のいど久くあねむむと毎の松いあむとさうら
 同 歳ちよとくさうていといあまきむるなこ代小あむる身あねむ
 子 うまきあまきむ世を代せむとさうていといは峰のまら風
 代 君が世のあまきむと小つとみあねむとあまきむいといあむと
 同 へまらむとむ松系あむとむとさうていといはゆる小
 同 子とせとみよとむらうとあまきむるなこ代小あむる身あねむ
 同 へまらむとむらうのうとあまきむとさうていといはゆる小
 万 ああ小のいあむとさうらむ世は國とさうていといはゆる小
 同 土地とさうらむとさうらむのよまあむとさうていといはゆる小
 形 君が世の代とさうらむとさうらむのよまあむとさうていといはゆる小
 同 きみり代の子と母のあまきむとさうらむとさうていといはゆる小
 代 久うこのあまきむとさうらむとさうらむのよまあむとさうていといはゆる小
 同 へまらむとさうらむのよまあむとさうらむとさうていといはゆる小
 六 日の光敷くさうらむとさうらむとさうらむのよまあむとさうていといはゆる小

上仁
 南宮内侍
 公忠
 為聖母
 國行
 松松
 存休
 長人
 元補
 右大卜
 い世
 目
 君が世

祝言

同 君が世のいど久くあねむむと毎の松いあむとさうら
 同 歳ちよとくさうていといあまきむるなこ代小あむる身あねむ
 子 うまきあまきむ世を代せむとさうていといは峰のまら風
 代 君が世のあまきむと小つとみあねむとあまきむいといあむと
 同 へまらむとむ松系あむとむとさうていといはゆる小
 同 子とせとみよとむらうとあまきむるなこ代小あむる身あねむ
 同 へまらむとむらうのうとあまきむとさうていといはゆる小
 万 ああ小のいあむとさうらむ世は國とさうていといはゆる小
 同 土地とさうらむとさうらむのよまあむとさうていといはゆる小
 形 君が世の代とさうらむとさうらむのよまあむとさうていといはゆる小
 同 きみり代の子と母のあまきむとさうらむとさうていといはゆる小
 代 久うこのあまきむとさうらむとさうらむのよまあむとさうていといはゆる小
 同 へまらむとさうらむのよまあむとさうらむとさうていといはゆる小
 六 日の光敷くさうらむとさうらむとさうらむのよまあむとさうていといはゆる小

系松あ異
 冬津
 式子内
 気前
 為也
 後松
 為昭
 年足
 麻帝
 後松
 六条太
 辰隆
 経辰
 今を

寄天祝

寄日祝

寄電祝

久祝君

烏君新世

寄世祝

寄民祝

代 予世に... 同 勝
 月 ちとせ... 費之
 代 活ま... 同
 代 毛礼... 惟方
 初 奉ご... 光補
 初 林葉... 赤海
 代 みあ... 只史
 初 意込... 乞蒙
 初 難波... 二又
 代 毛礼... 式子内
 代 いろ... 久人
 初 二中... 季短
 初 苗代... 歌九
 初 予世... 仁德帝

祝兩人

寄鏡祝

寄別祝

寄社祝

寄神祝

同 予... 貞業
 初 予... 忍男
 初 予... 貴之
 初 予... 大輔
 初 予... 田境
 初 予... 三右
 初 予... 皇政
 初 予... 史徳
 初 予... 三栄
 初 予... 村伝
 初 予... 先信
 初 予... 朝忠

寄神祇祝

雜祝沙

苗

金 君代もてはにやねのみまより祝ぞりり久しれとい
 用 ながの久しるべき君代もて世祇や免れり
 詞 祝のあら人神の久しよ松も歳心おひるを
 同 君代久しるべきにあら神も植えん後より
 代 いもなる森島の其れを植行もつと君代為と
 同 神代をいす川もきをわくとい世代君代ま
 同 君代小形もいすまきさるいおねとい神の古名あり
 大 きみまの根りあわく世後のまきの敷へみつくす
 根 せうとの敷とみえり之より子名唱ある後のまき
 子 君代世の敷もいす根りたさく此浦のまきあり
 形 ちから後のまきいす君代世の敷もいす
 同 君代よの年た敷とわくの後のまきと根りあ
 六 造りの敷といすつとみえり敷とをいす
 根 おいそまねるねよりそりて花舟の末はよくあらん
 右のまねる
 是後
 為忠
 神位
 多人
 長房
 直直
 多人
 中
 後
 貴之
 忠岑
 とい

琴

栴頭

脇息

碁

舟

草

蕪

子 笛のひたき世まてとつとていりてふるちち
 六 ちよりの秋たつとと引そへせと小君代ちとせと
 同 ちよりの君もつと小君代せれど加の枝より花を
 後 ちうそくせとてまき世代小君の番せんづ
 同 奇れ名の杉んちちつと君代つと根りあらん
 根 ちとせをいすそり舟の行来をいすかゆる
 六 秋とせ小の舟せとみえり小君代とせと
 万 君代世もいすらん君代の世れを植いす
 根 ちちちの上の山た植来と葉とまきと君代
 同 葉との花いすね植来へみえり小君代も
 初 ものつとてみえり小君代と世れを植いす
 代 みえり世の小君代も植来の葉とせす
 後 山人のいなる蕪も君代ちちのつとつと
 同 年の敷つとんとすあるあといす
 右のまねる
 貴之
 多人
 仁
 信子
 心世
 貴之
 中皇女命
 能直
 多人
 杉
 色
 多人
 山

孫祝
七夜

^{後松} 松乃子世の... 孫三位
^金 ... 周防
^同 ... 多山人
^同 ... 大権
^同 ... 通親
^同 ... 出巻
^代 ... 岡内
^{後松} ... 保昌
^同 ... 道安
^同 ... ちのこ
^同 ... 紫式
^同 ... 赤坂
^同 ... 公任
^同 ... 元輔

九の
 五十日
 毛き

元服

^代 ... 後三条
^同 ... 右大臣
^同 ... 入道
^同 ... 右大臣
^同 ... 左大臣
^同 ... 好古
^同 ... 元輔
^同 ... 元輔
^同 ... 元輔
^同 ... 元輔
^同 ... 元輔
^同 ... 元輔

花後記

治國裁松

雜天象

寄天象雜

雜地儀

雜動物

寄風雜

雜夕

寄山雜

寄水雜

古 老ねとてかどろ我分せせあざん老すいふ小何をす地

月 立をりてみくく川をさきまを老のあまの花候小をり

初 稀うらる松の雅く老をせいふこそ女世のりゆ也をさ

形 大元小野るふしの年よりぬ月日けふ行葉の元

後拾 さらの目小くつもの若み一板のさ月の日小くまをさ

代 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

後拾 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

干 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

後拾 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

新 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

後 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

古 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

後拾 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

古 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

後拾 入ふみのととの崎さるうら老ふらへははこえてあを地を

ねり

大を

益光

太上天皇

輔政

為政

堀川右

右大卜

益備

益高

常平

人まる

とんぼ

毎乳母

寄橋雜

寄海雜

寄川雜

寄木雜

寄苔雜

寄衣雜

寄枕雜

寄舟雜

寄玉雜

千 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

後 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

同 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

形 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

古 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

後 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

六 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

後 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

初 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

形 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

後 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

月 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

初 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

後 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

古 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

後 づらとてさるうら老ふらへははこえてあを地を

寄鐘籬 籬色

籬聲 籬香 寄花籬

形 言ぬらりゆくかゝて色ぬえ入おのこひつくとして
 籬 色の中小葉をいふいふをたたくて分りむ物おどるる
 籬 葉のこ小葉後々之落そが北条の高き音をまよこん
 代 葉をむる物もねど月影のうつる若の〜葉の音
 統 中よ小とていふそが葉まよる月と花と小葉わ〜ん
 籬 引んか〜むをたたく籬又まよ〜んた〜んた〜ん
 古 去らうあ秋の籬の葉は葉おのが香くた長也まよ
 籬 限りす君が〜あ小と折花の母〜るね物おどるる
 籬 籬〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜ん
 籬 葉イ木と吹ぬえり秋風小葉のまよる物おどるる
 籬 照月いまのとそ小ぶりのあ〜た〜んた〜んた〜んた〜ん
 籬 後ね

怜野集卷之十二籬之下終

怜野集これおくかよ

奉 越下けてあよむこよはあきたあ〜いと久〜りき
 籬 ちやく葉葉集よそそ〜んた〜んた〜んた〜んた〜ん
 籬 ち〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜ん
 籬 といふ事り〜ま〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜ん
 籬 あれと宇多醜醜乃清時より花山一條の清時までの
 籬 ち〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜ん
 籬 ち〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜ん
 籬 わ〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜んた〜ん
 籬 堀河の清時よあ〜れ〜んた〜んた〜んた〜んた〜ん
 一

了けりてとけせとぬりて大なりあ人影よは
よほつとれハなきよむるよそのもれもせし
あんなまにたるやそくとの学は影影れもせし
とさうよははまのゆれなかりり古にうむ
あつれとくはありていそきつてうき一乃ゆ
阿あさはいうよそといさんにいし人のこと
そまの詞もきんをいあさこいあつてよろほ
ことわさすんでみわひあきれいんよまきく
けり皆さういふいぬかかれをさあよふれと
とよむいてよみいつることわそのはるいせしけ

てよまんのははれよそありぬまらの学あ人のそ
めいせよむて古きことたるはつきのみまか
よまんとくはよの先よそいあをいひのあを
らむはよほつとれいさかきよらつわい
さうそいふことなるなりぬれいあよよい
へき事いしゆしよくそまわひいあをいひ
にあつていかなかつとれをみるあよらな
さはいくよあそあまよいあはまの聞し
よはをいしよいそん事をいすたよて
けり影よよりなんいあやほつとれあをい

かれはたれぞの人か影秘のこころはを事とわら
ぬるちたのつこしれいさほひはまんありけまあ
おんいさをふく思ふに影後さひゆいり一層よに
まてかかこめあさけりさひくことにあめてあ
まよひりしとてまりさこおゆるなれたとくひき
すま古哉きよふ人とてまあめ万れひせんよ此
きりしとまよひりてはこれの道とわらひまん
志まはさしちかしとき人れこれ古きをこおれ
ふへかれ影後を後れあさけりなれは志まひか
いといひてあまももにひきまんとひきまよふ事

れんこもきみしとてたをたしとてうたにの
まろりていふまはいとこけさしこよは清原
雄風やハまのたてあつるまよとては月よあせ
けま花をもてあまひてまのこよまのまはも
まをまほみしまらぬあまのわらひかろけり
くまひしとあの人をみらひいんまをのれは影
詠まよひしせん事いさこひ論しよよことなれ
ととれ世の人乃たよりとなしとまあまのあま
明題影林のこしむいりれまきおほのれとみま
よそやわねほゆる影まよひしとてあまの影のこ

六言、誠ありてむいふははてそまぬへかれとあか
甲に糸くくれるまれみゆいんぬに物めくろ
得しん人きよくさしてふとほへかれ事
まれかたよまたしめとさうくはにうい
くつれるまをむおむすに口たれゆのまよみい
むまれおめはうあさまあうま入いふは
ふれいり影をもまれそ一わいあさくひてその
せふとおもふま、いよよいじい事あつむとま
るなれいよるとりしりしめいひちたひく
まわ一誠ありてうそさくひちちうとてえい

をみはし先き影そふくしそまむちをいすく
おとせに後かまはとすくもおけ一又影乃
又字そまを同れ為めあらそのまけんあまハ
さるしおふれいせうあさうあたるしありまハ
まをよりま影よつまらよまはハせしれまあわ
まはめの古今六帖の例よまうしや題とあまを
歌をまうしうさうありを飛つおはうれまの
まうしや、まはあまきい、ま同再とほうしすの
しけあま、たしむをり後あまをさくしなうら
ころく、らわい、まはくせしむをぬま、いんかまに

よしまぬはる人とあはぬすのほ口なりしや
しらりくあふしとさあいにとふれをわさるゝのこ
れよまのちの勢はしとねはやくもまたとらま
せくのさくはえしひかふる集まのうらなるよ
いとりて古り人れひらひせうせ一家集うら南
ふれたるしうらにほらうにとあしつゝられま
あめたるらよあむしとらたはまてはえせと
まへるやういふがほらあはをめて、芳宜園の
るのふるくしたによし学一とまといひらん
あふよよりてあさうは野にならうとあ
けよ一と一いふとたほりれりやけ集まに
なりれり。あはよしまるしる人れよりのま
わたりしんよまられをさとあとなさほし
たあまのよらむ

文化は三と勢はつふあわかぬしきやうの
けのよまはあま

諸集の歌、系類を著つて、其の類、乃池田顯等
を著す、其の類、乃池田顯等、其の類、乃池田顯等
也、其の類、乃池田顯等、其の類、乃池田顯等

西木千幹

文化三年十月刻成

清原雄風藏板

拾野集拾遺

古人艱苦駢抄

此古書、乃池田顯等、其の類、乃池田顯等、其の類、乃池田顯等

